

啄木のふるさと「もりおかの知歌」 平成二十年度 冬の部 優秀賞発表

『啄木のふるさと』「もりおかの短歌」は、啄木が生れ育った盛岡を訪れる観光客や市民による啄木短歌の特徴である『三行書き』の短歌づくりを通じて『短歌のまち もりおか』を推進することを目的に実施している事業です。

年間を四つの期間（夏の部・秋の部・冬の部・春の部）に分け募集。平成20年12月から本年2月との3ヶ月間、募集した冬の部にも、夏の部・秋の部同様、観光客や市民の方々から多くの短歌が投稿され、この度優秀賞10首が選定されました。

投稿箱は、当所や盛岡市役所、啄木関連の観光施設、市内ホテルなどに設置しており、現在は春の部を募集してしておりますので、啄木になつた気分で三行書きの短歌に一度挑戦してみてはいかがですか。

優秀賞 十首

ふゆ
がつしりと石に根を張り
いしねは
いしわ
さくら
ちからたま
石割り桜に力賜はる

岩手県奥州市 岩渕 正力

草の根と人の技とが
脈を打つ
なんぶしほりの紫の艶

この街にまで押し寄せる
氷の薄い高松の池

岩手県盛岡市 吉田 晃生

たくばく
みち
よ
いしぶみ
碑は
木の道を詠みゆく

うす日さす
たくほくかひ
啄木歌碑をめぐりつゝ
わかだんじよ
若き男女がたのしげに手話す

岩手県盛岡市 花坂 品子

つ
わなぐ手の

もり
お
り

つなぐ手の
ゆびわて

盛岡のふたわ よる

指輪のサイズ知りたくて
ゆつくり歩く雪あかりの街

夜を二つに分かちたる

ゆつくり歩く雪あかりの街
岩手県盛岡市 梅津 利之

卷之三

うそく
ひ
て

宮城縣仙台市 阿部堅市

蝶の火に照らされて
いしがきゆきこよい

平成二十一年三月選　冬の部

あたたか
みゆき

投稿數
九十六首

市内ホテル等に設置されている投稿ボックス



冬の部優秀賞十首

もりおかの
まばゆき氷柱見上げれば
含みて笑みしおき兄を恋ふ

北海道石狩市 敦賀 國子
十二月
ゆきうにがつ
雪がちらつく盛岡のICOに響く
じゆうにがつ

そばすする音
おと
青森県八戸市 下館 真依
ひい

こずかた しろあと ふ
不來方の城跡に降る
しろ ゆきさんしゆゆ み

白い雪山茱萸の実の
あかひ た

赤引き立てる

岩手県盛岡市 鈴木 充

す
捨てし夢を叶へし人の
ゆめ かな ひと
家に居て啄木はただ
いえ い たくぼく

『詠へ』と云へり

宮城県仙台市 紺野 紫音

ちちはは
父母のねむる故郷もりおかの
ふるさと
たるひ ふ
垂氷に触れし
おさ ひいづく
幼な日何処
おと

東京都新宿区 佐藤 慶子

八十路なる母のひそかな
やそじ
はは

樂しみは

「一才からのかっぱえびせん」

島根県大田市 福田 正子

やまかわ め
山川を愛でし啄木盛岡を
たかほくもりおか
たび
旅してひたる

その生き様に
いざま

秋田県にかほ市 伊藤 チセ子

初恋の時の心にもどりたく
雪踏みしめて
新婚の家に来

神奈川県横浜市牛島芳一

おおゆき もりおか まら
大雪の盛岡の街

つまき はじ はい
妻と来て初めて入る

啄木の家

福島県会津若松市米山高仁

こゑ
息子らの運

ひら ねが かいうんばし
開けと願い開運橋

ひとり旅でもわれは母なり

群馬県藤岡市山田真理子

平成二十三年三月選 冬の部

投稿数 六十七首

選者 山本玲子氏

冬の部優秀賞十首

岩手山独り占めする窓ですと
てんきよあんない
転居案内の
はす

メールが弾む

岩手県盛岡市 小野 泉

ひまわりの
はな
花のごとくに輝きて

母は静か白寿に入りたり

岩手県紫波町 裏岩 フヂ

この駅の待合室で
えき まちあいしつ
むすめ

娘らの

スマホの仕草見るも楽しも

岩手県盛岡市 金澤 正幸

はらはらと
まち ゆき おも
舞い散る雪にふと想う

はらはらと
まち ゆき おも
舞い散る雪にふと想う

故郷に待つ母の横顔

北海道函館市 田村 博人

盛岡の冬の
もりおか ふゆ
わび た がた
侘しさ耐え難く

花屋に入りて水仙を買う

岩手県盛岡市 鈴木 充

ふたりき た いわやま てんぱうだい
二人来て佇つ岩山の展望台

さゆう
左右にわかれ

わがやさが
我家探しぬ

岩手県盛岡市

鈴木 樹人

ふるさとの宝
たから

青森県八戸市 宇部 好子

もりおか　いしわ　ざくら
盛岡の石割り桜

げきしん

激震に

たから　み　さき
耐へし力を見せて咲しか

とうきょうとくばく　まつしや　まさき
東京都板橋区 松下 正樹

なか　はし　かぜ　ふ　ゆ　ひと
中の橋を風に吹かれて往く人に

かも　ゆ　う

鴨の揺れ浮く

かわもちか

川面近しき

岩手県盛岡市 須田 美喜子

い　つ　よ
凍て付く夜

さくらやま　うたけいこ
桜山にて詩吟稽古

いま　ゆめえり　こう

今は懐かし詰襟の頃

岩手県釜石市 谷藤 稔

平成二十四年三月選 冬の部

投稿数 百十五首

選者 山本 玲子 氏

冬の部優秀賞十首

早々と神に召されし啄木を

長寿者とせし

喜劇に酔ひしれ

盛岡市 鈴木 操

凍りつく空気を

裂いて割ることく

裸参りの行列が行く

盛岡市 中島 久光

雪あかり
小さき灯火 あつまりて
願いをこめし 復興への道

盛岡市 石川 節子

中津川鰐のそ上を共に見し
夫遊きたりて
ひとり訪る

盛岡市 兼田 紀美子

かつて住む地に降り立ちて仰ぎ見る
岩手の山は

嚴冬期
酒買地蔵多忙なり
裸参りに見る者熱い

盛岡市 三澤 信裕

かがや
銀の輝き
かつて住む地に降り立ちて仰ぎ見る
岩手の山は

埼玉県北葛飾郡 小野寺 史子

「また歩こうね」と賀状くる
なかつがわ
中津川は、いま
白鳥の合唱舞台

盛岡市 昆野 寛顕

ある
がじょう
「また歩こうね」と賀状くる
なかつがわ
中津川は、いま
白鳥の合唱舞台

雪晴れに黒き瞳を輝せ
たくばくかた
ゆきば くろ ひどみ かがやか
啄木語る
ひと

女にひかれり

高崎市 小池 敏夫

食べた後スキップできまい わんこそば
おなかをすかせて
またちようせんだ

盛岡市 遠藤 みのり

アマリリス花は咲けども
もりおかの最低気温
マイナス十度

盛岡市 鈴木 充

〔説評〕震災復興への願いや盛岡の風景、行事が歌に詠まれています。それはまた時代を窺わせ、今を大切にし、自由で、素直な心が表現されていると思います。

平成二十五年三月選 冬の部

投稿数 七十一首

選者 山本 玲子 氏

冬の部優秀賞十首

中の橋たもとの木々に
灯りたるイルミネーション

川面に揺らぐ

盛岡市 鈴木 充

啄木の想ひなぞりて
見る山の真白き肌に

陽光は射す

埼玉県北葛飾郡 小野寺 史子

南部よしやれ

牛追ひ歌も聞こえたり

民謡酒場は今宵にぎやか

盛岡市 深米 公子

故郷の温り乗せて
進みゆく—I GR

雪舞いの中

群馬県高崎市 小池 敏夫

こがらしが 舞い始めたよ

通学路

りんごほっぺの 声高くなる

盛岡市 西川 政勝

啄木の

故郷巡ぐり北へ行く

クラスメートと古稀祝いに

釜石市 谷藤 稔

ゴム長が正装なりと
北国に住む宿命か

今日も雪搔く

盛岡市 中島 久光

じい
まご
つく

雪明り
ゆきあかり

い
よる
あたた
ども

盛岡市 小笠原 敏夫

つま
ま
あしど
かる

片栗の 粉を踏むよな
もりおか みち
盛岡の道

盛岡の道

東京都中野区 今井 貨預

「独り居は辛がんすよ」と

やんわり言ふ

友の盛岡弁に救はれ

盛岡市 鈴木 操

盛岡の冬の特徴をつかんで説んでいただきましたが、自然が創った美しい光景の表現の仕方にいたぶる懊悩に至つた様子が窺われます。しかし彼は、単に光景を説くのではなく、作者の心の働きを説んでいただければ、と思ひます。

平成二十六年三月選 冬の部

謹者 山本 玲子 氏

投稿數 九十首

平成26年度／冬の部

平成二十六年度『もりおかの短歌』冬の部

選定十首及び講評

ふるやことを ゆりかごにして
歌よめる

岩手路の 雪の舞に 包まれて
聴こえる母の
おかえりなさい

盛岡市 西川 政勝

栃木県栃木市 辻 泰臣

二月生まれの 詩人を思ふ
おもう

美酒を飲み

ゆつたりとした朝迎え

雪踏みしめて今日が始まる

青森県八戸市 重田 博

ほのぼのと

ゆらぎやさしき雪灯を見つめ
ひ

何想いしや佇める友

盛岡市 高橋 ミキ

如月に 春近しと立つ鳥に
きそくに はるちかしとたちつとりに
やまい ゆきび
弥生の雪冷え
伝えるすべなし

盛岡市 石川 節子

雪どけの
中津川の せせらぎは
なかつがわの せせらぎは

楽しく遊ぶ 童子らに似て
うきよくあそぶ どうじらにのぞむ

盛岡市 藤田 三喜子

もりおかに

浅葱出れば春近し

母の言葉に酢味噌和え造る

もう祖母の生家なけれど

冬涸れぬ大慈清水に

青菜洗へる

盛岡市 堀米 公子

雪どけを待たずに咲きし

石割の梅花の香り

天満の丘

神奈川県横浜市 伊藤 修文

【講評】

盛岡を訪ね、あるいは盛岡で暮らしていながら目にした風景、出会った味を温かな心で詠んだ作品がたくさんありました。そしてまた「歌に詠んでみたい」という欲求が自然と湧き起つたのでしょう、瑞々しい作品ばかりでした。

△マナスの町から届く

冬の幸

味わいながら エールを送る

平成二十七年三月選

啄木ソムリエ・山本 玲子

盛岡市 赤坂 昌信

『もりおかの短歌』

冬の部 優秀賞十首

頬を刺す

朝の寒さが懐かしく

帰ってきたのこの盛岡に

岩手県盛岡市 小笠原 直美

岸辺にて集いなき交う白鳥は

二度泣き橋と

知らずやあるらむ

岩手県盛岡市 蟻川 ひろみ

津軽弁にて熱心に太宰説く

友へ聴かせし

啄木のこと

青森県青森市 鈴木 操

キュツキュツと

雪が鳴く街 盛岡で

母と離れて 初めての冬

岩手県盛岡市 林 昭子

雪明り

橋のたもとの古書店は
咳する店主ガラス戸の風

東京都練馬区 久慈 博子

ふりむけば我を抱きし岩手山

春の佳き日も

凍える朝も

宮城県仙台市 郷家 美磨

寺町の雪の御堂に

寒行の僧の読経が

静かに流る

岩手県盛岡市 小林 貴史

また来るよ
二度泣き橋から手を振つて
巖鷲山としばしお別れ

埼玉県越谷市 倉部 りえ

如月に
生まれし人の夢を見て
かなしく眺むふるさとの山

岩手県盛岡市 赤坂 昌信

いとほしや 泣き訴へつゝ
萎えかえり 尿、まみれ寝る
エンチこの赤児は

東京都江戸川区 岡本 誠教

〔講評〕冬と言えば肌を刺すほどの冷たい風を運ぶ岩手山の吹き降ろし。その凜とした風景はまるで座禅のときにも肩を打たれるような心地よさがあり、叱ってくれる親のようでもあつたり。そこに故郷の優しさを見出したのでしょう。

※今回審査の結果、ジュニア部門の優秀賞は、該当がありませんでした。

平成二十八年三月選 冬の部

投稿数 三百六十八首

選者 山本 玲子

『もりおかの短歌』

冬の部 優秀賞十首

元日の朝仰ぎ見る岩手山
その凜凜しさに
姿勢を正す

盛岡市 中島 久光
がんじつ あさあお
いわてさん

白い朝高鳴る鼓動踏みしめて

愛し君待つ

赤レンガ前

洋野町 芦口 このみ

くりやがわいと みだ
厨川糸の乱れの雪舞台

九郎も駆けたか

八幡平路

大阪府大阪市 石川 佳子

頑丈がとりえの父の初入院

桜吹雪も

色あせて散る

岐阜県加茂郡八百津町

細江 隆一

ほうおんじ
報恩寺の

五百羅漢に紛れ込み

知らぬ顔する節分の鬼

青森県八戸市 木立 徹

さよならといふより先に

こぼれたる

白息悲し盛岡の駅

宮城県仙台市 奈良 理英子

がんどうこ
岩洞湖の

根氏零度の氷に棲む

銀白色のわかさぎを釣る

盛岡市 小林 貴史

古希過ぎて 父の慰問に
ちら いもん

ひた走る 幸せと呼ぶ
ふゆ こう えくどう

冬の高速道

青森県三沢市 熊谷 正

冬の部（ジュニア部門） 優秀賞一首
ズルズルと 食べ終わつたと
思つたら ジャンジャンと来る
わんこそばかな

北海道札幌市 玉井 晴規

若水を取りて
わかみず と
鉢屋の町歩るく
かたや まちあ

今年はじめの仕事なりけり

盛岡市 赤坂 昌信

おひやらんせ暖簾上げつつ
てまね のれんあ
手招きす
てまね てまね

駄菓子屋に入りて茶をいただく
だがしや い ちゃ
盛岡市 堀米 公子

〔講評〕岩手山を背景に雪が舞っている。白息（しらいき）がそれに溶け込んでいる。刹那の時間の中で小さな命のともしひたちが互いを確かめあっているかのように。厳しい冬の寒さが人の温もりを際立たせているのかかもしれない。

平成二十九年三月選 冬の部

選者 山本 玲子
投稿数百十六首

『もりおかの短歌』

冬の部 優秀賞十首

鬼やらひの
さざめきを聞く夕まぐれ
やしらちか
み社近きもりおかの街

青森県上北郡七戸町 大串 靖子
おに ゆふ
まち

銀河行く鉄道待ちて
ついしやは ひと かた
停車場の人と語れり

啄木のこと

岡山県岡山市 才本 有香

押し寄せる人々の波
たいこ なみ
太鼓の波にあなたを探す
さが

中央通り

長野県長野市 酒井 路華

雪の朝曇るガラスに
あさゆう あさくも

四才のちひさき指が
えが いわてさん

描く岩手山

青森県八戸市 田茂 博之

公園の啄木の碑を詠み終えて

「じやじや麺食べよう」と
さみ い

君は言つたね

宮城県遠田郡涌谷町 渋谷

裕子

朝夕の橋から望む岩手富士

たんしん よ
朝夕の橋から望む岩手富士

単身も良し

もりおかの街
まち

一関市 吉田 寛一

師走来て
しわすき

昔の友と飲む酒は
むかし とも の さけ
くぐる暖簾の数だけ楽し
のれん かず たの

盛岡市 赤坂 昌信

喜寿となり雪の城跡上りきて
啄木の歌碑に
若さをもらふ

盛岡市 八重樫 敏夫

穏かに夢を語りし人もいて

「擬宝珠」という名の

小さな酒場

東京都練馬区 久慈 博子

今は亡き

父の代わりに迎えしは
ありがたきかな故郷の山

神奈川県横浜市

勝政 英人

〔講評〕秋祭りのころから歳晩を経て、お正月、そして
厳寒の季節が「冬の部」に当たります。もしかしたら応
募作品は少ないのでは、という不安をよそに総数144
首の応募は嬉しい驚きでした。冬の盛岡に旅行者をはじ
め多くの人々の往来のあることを知り、寒さに耐えつづ
めエネルギーに満ちた様々な場面に歌を通して出逢えた
ことも喜びでした。

平成三十年三月選 冬の部

投稿数 百四十四首

選者 松田 久恵